



TITLE:

# バボージャブの軌跡："モンゴル獨立"をめざし挫折した、ある内モンゴル人の實像

AUTHOR(S):

中見, 立夫

---

CITATION:

中見, 立夫. バボージャブの軌跡："モンゴル獨立"をめざし挫折した、ある内モンゴル人の實像. 東洋史研究 2012, 71(2): 282-315

ISSUE DATE:

2012-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/200229>

RIGHT:

# バボージャブの軌跡

——「モンゴル獨立」をめざし挫折した、ある内モンゴル人の實像——

中 見 立 夫

- 一 本稿の視角と課題
- 二 清朝崩壊期までのバボージャブの行動
- 三 ボグド・ハーン政權とバボージャブ
- 四 ボグド・ハーン政權軍の内モンゴル攻略戦とバボージャブ
- 五 パッペンハイム事件とバボージャブ、そしてロシア政府の對應
- 六 孤立化するバボージャブと、かれの彷徨える軍團
- 七 バボージャブと日本人「大陸浪人」
- 八 日本外務省囑託、須佐嘉橘のバボージャブ本據地訪問
- 九 日本の反袁世凱工作とバボージャブの進軍、そして死
- 一〇 結語、バボージャブの軌跡がしめすもの

## 一 本稿の視角と課題

一九二一年に勃發した「辛亥革命」は最後の東洋的專制帝國、清朝の崩壊という意味と中國における共和制國家の誕生

という、ふたつの意味がある。だが同時期この地上にはロマノフ朝ロシア、オスマン朝トルコ、ハプスブルグ朝オーストリア・ハンガリーなどの地域的世界帝國が存在していたが、いずれも二〇世紀の最初の一〇年代に滅亡し、その領域内における國家の再編は二一世紀に入った今日までも餘波が続いている。ところがおなじく地域的世界帝國であった清朝の場合、中華民國が繼承國家であったとしても、その領域のなから、これとは別にあらたな國家の形成に成功したのは、結果的に外モンゴルのモンゴル人のみであった。同年二月一日に外モンゴルのハルハ地方のモンゴル王侯層、佛教界は獨立を宣言、ついで二月二十九日には活佛、ジェブツンダムバ・ホトクトを皇帝（ボグド・ハーン）に推戴し、いわゆるボグド・ハーン政權を樹立した。しかも同政權がめざしたのは舊清朝領域内のモンゴル人の統合と獨立であり、内モンゴル、バルガ地方などにおいてもハルハ・モンゴルの獨立へ呼應する動きがおこり、さらにフレレー（漢語名、庫倫。ロシア名、ウルガ。現在のオランバートル）へ赴きボグド・ハーン政權へ參畫する内モンゴル人もみられた。<sup>(1)</sup> 本稿で検討するバボージャブも、そのような人物のひとりである。

だが日本においては、バボージャブは、一九一〇年代後半、日本人「大陸浪人」川島浪速が清朝宗室の肅親王善耆を擁し日本陸軍の援助をえて清朝復興を企てた謀議、「第二次滿蒙獨立運動」<sup>(2)</sup>のモンゴル側關與者として知られている。一方、中國においては「日本帝國主義」の走狗となり「祖國」を裏切った「モンゴル族匪賊（蒙匪）」として、いまなお筆誅をあびている。注目すべきはモンゴル國における評價であろう。六〇年代つまり社會主義時代に刊行された『モンゴル人民共和國史』<sup>(3)</sup>においてさえ、モンゴル獨立運動へ關與していた時期までのかれの活動に關しては、同情的な筆致で言及されていた。<sup>(3)</sup> さらに民主化をへた今日のモンゴル國では、悲劇の「民族主義者」という評價までもでている。

筆者は、さきに英文でバボージャブに關する小稿<sup>(4)</sup>を發表したが、その後にみることができた史料にもとづき、バボージャブの軌跡を本稿で再檢證する。とくに清朝崩壊後、獨立モンゴルの領域へ内モンゴルを加えるべく外モンゴルへ赴いたバボージャブが、なぜ政治的方向性において相反する、清朝の復興へと加擔することにより自滅したのか。かれの生涯は

餘りに誤傳と憶測、とりわけ死後に日本人により創作された虚構にもとづき脚色されている。本稿ではバボージャブの行動を比較的、客觀的に追跡していたロシア帝國の外務省文書を軸に、日本側、モンゴル側史料を分析することにより解き明かしたい。

## 二 清朝崩壊期までのバボージャブの行動

バボージャブ<sup>(5)</sup>は、一八七五年、内モンゴルのズスト盟トメド左翼旗（通稱、東トメド旗、あるいはモンゴルジン旗）で牧業ではなく農業に従事する一般モンゴル人家庭にうまれた。そして一〇歳のころ一家は隣接する養息牧牧廠（通稱、スルグ旗）へと移住している。スルグ旗は一六九二（康熙三十一年）年に、ホルチン左翼前旗（ビント王旗）、トメド左翼旗のモンゴル王侯が清朝に對し旗地の一部を献上したことを機縁とし、清朝はその地を牧廠とし官馬と「清三陵」、つまり永陵、福陵、昭陵に供する祭牲を飼育していた<sup>(6)</sup>。だがオーエン・ラティモアによれば、同地ではモンゴル人が長期に渡り農業をおこなっていたという。ついには清朝による牧廠の維持が困難となったため、一八九六年に漢人農民への「丈放」が開始され、さらに一九〇二年、彰武縣が設置された。漢人農民の流入はモンゴル人とのあいだに緊張と衝突を惹起し、ラティモアによれば「モンゴル人匪賊／蒙匪／“Mongol bandity”」が発生する原因となったが、騷擾のなかで「最も著名なモンゴル人指導者のひとり」として登場したのがバボージャブであったという<sup>(7)</sup>。ラティモアおよび彼と並ぶ二〇世紀における代表的モンゴル學者、ヴァルター・ハイシツヒは、一九三〇年代に東モンゴル（内モンゴル東部）で實地調査をおこない、バボージャブと「十三人の仲間／“Thirteen Companies”」／“Dreizehn Kompanien”」の活動が、モンゴル人のあいだで歌謡（ballads）として當時まで語り継がれていたと述べている<sup>(8)</sup>。

ついで日露戦争が始まると、日本軍人により組織されたロシア軍に對する後方攪亂工作へ参加したと、バボージャブの死後に刊行された『東亞先覺志士記傳』などの日本語文獻にはでてくる。だが當時の日本側記録にはバボージャブの名を

一切みだせないで、バボージャブの「親日性」を強調するため、その没後に日本側関係者により創作あるいは誇張された挿話である可能性があった。しかし烏蘭塔娜氏により、一二年一二月三日づけ四平街駐在宮内少佐發參謀總長宛電報の一節に「パプチャブ」ハ日露戰當時我井戸川中佐ノ下ニアリ<sup>(9)</sup>と報告されていることが指摘された。またキャフタ露中蒙三者會議の北京政府側代表をつとめ、ついで一五年一〇月に外モンゴルへ都護使駐紮庫倫辦事大員として着任した陳録は、バボージャブの問題で「連日、密偵を送り巴<sup>(10)</sup>【バボージャブ】匪情勢を調査」させていたが、同年一二月二日づけ日記で「バボージャブは内モンゴル東トメド旗人で、はじめ鬚匪となり日露戰爭時はみずから日本軍に投じ、後備隊に充たる<sup>(10)</sup>」としているところを勘案すると、日露戰爭期に日本軍と關係をもっていたのは事實と確認できる。

しかし、どの程度の活動をおこない日本軍の活動へ貢献したかは不明であり、さらに日本側も現地駐在軍事情報筋を別として、日露戰爭後においてもバボージャブの名前を記憶に留め、さらには關係を持続していたかは疑問であり、「彼が早くから日本と深い關係を持<sup>(11)</sup>」つていたとまでは斷言できない。ましてや『東亞先覺志士記傳』が説くような、バボージャブが「深く皇軍の威徳に感じ、爾來日本を尊信して終始渝るところなく、死生を共にした日本人に對し深く信賴の情を抱いてゐた<sup>(12)</sup>」とする根據はない。日露戰爭終結後、前記宮内少佐電によると「部下百五十ト共ニ彰武縣附近ニ於テ巡警ト爲リ」、他方、陳録は「兵五十餘名を帶して彰武縣警察隊長となる<sup>(13)</sup>」としている。おなじく「馬賊」として日露戰爭に關わつた張作霖、張景惠などが、東三省制が施行されるなかで清朝政府により地方組織内で公職をえたことを考慮すると、バボージャブの場合も日露戰後における清朝現地當局側からの「馬賊」慰撫工作の結果といえよう。

### 三 ボグド・ハーン政權とバボージャブ

辛亥革命による清朝崩壊、ハルハ地方におけるモンゴル獨立宣言は、バボージャブのみならず廣くモンゴル人の運命にあらたな展望を拓くものであった。一九二二年はじめよりボグド・ハーン政權から内モンゴル、バルガなどに對する合流

への勸諭がはじまり、対象となったモンゴル諸旗でも呼應する動きがみられた。スルグ旗に隣接するジェリム盟のホルチン左翼前旗のビント王ゴンチュグスレンはフレヘ至りボグド・ハーン政權の總理大臣府副大臣へ任命されている。一二年八月にはホルチン右翼後旗のオタイが武裝蜂起をおこすものの鎮壓されフレヘと逃れ、ボグド・ハーン政權軍務省副大臣に就任している。ボグド・ハーン政權へ合流するためフレヘと赴いた内モンゴル王侯に對しては、清朝時代の爵位に應じてボグド・ハーン政權側も副大臣級の地位を與え接遇したのであった。

バボージャブがフレヘと赴く經過に關しては、陳錄が一五年二月二日づけ日記において、「アルホア公ナスンアルビジフに隨同しフレヘ（庫倫）に投じ、營長に充てられ、ついで公【*gung*】の位を賜る」としている。<sup>(15)</sup> また烏蘭塔娜氏はモンゴル國の國立中央アルヒーフ所藏文書にもとづき、「直接フレヘに【彰武縣から】赴いたのではなく、まずビント王旗に立ち寄つて、そこでボグド・ハーン政權の命令により内モンゴルで兵を徵募していた博王旗のアルホア公ナスンアルビジフに召募され、アルホア公率いる軍の南方方面營長となつて開魯での蜂起に参加し、一二年二月中旬頃にフレヘに到着した」ことを明らかにされた。<sup>(16)</sup> 彰武縣出發時にバボージャブと行動をとにした兵力は六〇名（フレヘ到着時は九〇名）程度であつたが、その僚友のなかにバボージャブの妻の弟、あるいは姉の夫といわれ、終生かれに従つたタサ・シヨボー（*Tas šibayun / Tasašibayun*）の名があげられている。<sup>(17)</sup> もともと平民であつたバボージャブは、他旗の王侯であるナスンアルビジフとのあいだで主従關係にあつた譯ではない。モンゴルの獨立宣言とともに各地から大小様々なモンゴル人のグループがフレヘへと駆けつけているが、ボグド・ハーン政權によりかれらは兵力として再編成された。次章でみるように一三年一月、内モンゴル攻略戦が計畫されたとき、バボージャブはダリガンガ方面派遣軍の指揮官としてナワーンゴムボ、ハイサンとともに任じられ、ボグド・ハーンから公の位を與えられたと考えられる。

#### 四 ボグド・ハーン政權軍の内モンゴル攻略戦とバボージャブ

一九一一年二月一日のモンゴル獨立宣言は、清朝政府により強行實施された、對モンゴル新政策に起因しており、それに反發したハルハ地方のモンゴル王侯層、佛教界が、辛亥革命つまり中國本土における清朝支配體制の動搖をみて、一氣に清朝との決別を宣言したものである。ロシア帝國側は、この獨立を承認ないしは後援する意志は全くなく、はじめモンゴル王侯と清朝政府とのあいだで調停をおこなうことを考えていた。だが二年に入り清朝體制が終焉を迎え、袁世凱に率いられる北京政府ができる一方、ボグド・ハーン政權が實體を備えてくるとともに、次第にロシア政府は對應方針を變更せざるをえなくなる。同年一月一日に、ロシア政府はモンゴル問題に關する從來からの立場を整理したコミュニケ<sup>(18)</sup>を發表したが、同コミュニケで言及される「モンゴル」が意味する地理的範圍へ注目したのが日本政府であつた。日本は「南滿洲」を勢力範圍としてロシアから承認をえていたが、さらに内モンゴル東部への勢力進出をめざしていた。ロシア側も日本とのあいだで内モンゴルにおける相互の勢力範圍畫定の必要を認めており、上記コミュニケ發表を契機として、第三次日露協約に關する交渉がはじまり同年七月八日に妥結する。

この第三次日露協約によつて北京の經度を分界線として、その東側は日本、西側はロシアの勢力範圍として相互承認された。日本では、このときより「滿蒙」という特異な地域概念が登場するが、それは地域としての「滿洲と蒙古」、ないしは「滿洲族とモンゴル族」という意味ではなく、上記第三次日露協約によりロシアおよび列強により承認された日本の勢力範圍、具體的には「南滿洲」と「東部内蒙古」をさす限定的な用法であつた。したがつて當時の日本人が認識する「滿蒙」には外モンゴルは原則ふくまれていない。<sup>(19)</sup>一三年に阿部守太郎外務省政務局長が起案した文書には、「南滿二於ケル帝國特殊ノ地位ト日露協約ニ基ク勢力範圍ノ畫定ト二顧ミ從來往々滿洲問題解決論ナルモノ漠然世人ニ唱道セラルルアリ又近頃第三回日露協約ニ依リ我勢力範圍ヲ内蒙古東部ニ擴張シタルニ伴ヒ所謂滿洲問題ヨリ更ニ一步ヲ進メ滿蒙問題

ノ解決ナルモノ人口ニ上ルニ至リ【傍線は中見による<sup>(20)</sup>】と日本における政治狀況が書かれている。

一方、ロシア政府は一九一二年五月六、一四、一八日の三日間にわたり關係實務者會議を開催し、モンゴル獨立問題に關する解決目標を、外モンゴルに地域を限定した、中華民國宗主權下の、ボグド・ハーン政權による高度自治形成、および外モンゴルにおけるロシアの經濟權益獲得に決めた。<sup>(21)</sup>この目標達成のため、前駐清公使、イワン・コロストヴェツをフレーに派遣しボグド・ハーン政權と交渉させ、同年一月三日に「露蒙協定」および「附屬商業議定書」が締結された。ロシア帝國は、この露蒙協定を梃子として北京政府を交渉の場に引きずりだすことをめざしたが、ボグド・ハーン政權側は内モンゴルにおける實效支配地域を擴大すべく、一三年一月より同政權へ參加した内モンゴル出身者を主體として、内モンゴルへの軍事進攻をおこない、その指揮官のひとりとなったのがバボージャブであつた。

このときのボグド・ハーン政權軍の行動に關して、橘誠氏は進攻對象がシリン・ゴール、オラーンチャブ兩盟に限られ、「從來、露蒙協定締結後、直ちに支配地域の擴大を目指して軍事行動が起こされたかのように記述されてきたが、その前提には軍派遣地域のボグド・ハーン政權への歸服表明があり、軍の派遣はそれら支配下に組み込んだ地域の防衛的要素が強かつた<sup>(22)</sup>」ことを指摘されている。つまり上記兩盟の全モンゴル旗は、ボグド・ハーンに對する忠誠と服従を誓つたものの、その事實をもつてボグド・ハーン政權の實效支配下に入つたとはいえない。軍事行動によつてボグド・ハーン政權の存在をしめし、中國側からの反攻へ對峙する必要があつたのである。戰鬪は激烈をきわめたが同年半ばの時點まではボグド・ハーン政權側が優勢であり、八月二日、同政權は内モンゴルとの境界近くに位置するユグゼル僧院の活佛、ユグゼル・ホトクト・ガルサンダシを「東疆大臣／*Jegün kīčayar-un sayid*」に任命し、影響下に置いた内モンゴル地域擔當の責任者とした。だが次第にボグド・ハーン政權軍は武器の缺乏に悩むこととなる。さらに同年夏ころからは、モンゴルの獨立運動へ早くから參加し、ボグド・ハーン政權の内務省司官（副大臣補）となつたハイサンや、バボージャブとともにハルハへ赴いたナスンアルビジフなどが中國へ歸順すべく密かな接觸を北京政府とおこなつていた。<sup>(23)</sup>



ロシアと北京政府とのあいだでは、一九二二年一〇月よりモンゴル問題をめぐる外交交渉がおこなわれたが、曲折をへて翌一三年一月五日に「外モンゴル自治に關する露中宣言」が締結され、その第四條において北京政府は「露蒙協定」を承認すると同時に、ロシア政府は中華民國宗主權下のボグド・ハーン政府による自治區域を、外モンゴルに限定することを認めた。バボージャブらの目標がボグド・ハーン政權の領域に内モンゴルを組み入れることであつたとすれば、この段階で、あるいはロシア政府がモンゴル問題への對處方針を確定した一二年六月の時點において、すでにそれは實現可能な命題であつた。北京政府はロシア政府を通じてボグド・ハーン政權へ對し壓力を加え、一三年二月一六日、ボグド・ハーン政府總理大臣、サイン・ノヨン・ハン・ナムナンスレンは、サゾノフ露外相に對して内モンゴルからの撤兵を通告した。だがフレールからの進攻軍のなかでバボージャブに率いられる部隊のみは、内・外モンゴル境界の内モンゴル側、ホーチッド、ウジュムチン兩旗の接壤地帯に根據地をおき、外モンゴル領内への完全撤退をおこなおうとはしなかつた。

一九一五年のはじめ、具體的には共戴五年春正月十九日（＝一九一五年三月五日）に「敕命により東南疆のモンゴル人を鎮撫する官兵總管大臣／*jarly-iyar yaryaysan jegin emün-e kičayar-un mongyolčud-i tübsidken toquniyulqu tüsimel čeng-i yerünkien jaraq sayid*」の官職名でボグド・ハーン政權軍務省に對して提出された、バボージャブの部隊の兵員冊（出身地、名前、年齢をしるしたもの）が残されており、一五年はじめ段階における、かれの指揮下兵力の實態が分かる。最初のグループはタサ・シヨボー（三六歳、トメド出身）を隊長とし、出身地も東モンゴル各地に廣がり總數二〇一名、以下のグループはすべてゾー・オダ盟出身者が隊長であり、それぞれ二〇四名、二三六名、六六名、二三六名、二三六名、二一五名、二三六名、一三六名と構成員數があげられており、總計一七六六名となる。おそらくボグド・ハーン政權へ給與を請求したときの根據であろうが、ほぼ通説であるバボージャブの兵力、二千人と概ね一致する。<sup>(24)</sup>

露蒙協定ついで露中宣言の成立によって、いわゆるモンゴル獨立問題が解決したのではない。最終合意形成をめざす關

係三當事者、つまりボグド・ハーン政權、ロシア政府、北京政府による會議が、一四年九月八日より露蒙國境の街、キャフタで開始された。これよりまえ七月二八日には第一次世界大戰が勃發しており、三者間交渉の主導權を握っていたロシア帝國は早期妥結を急いだ。一方バボージャブは前記ガルサンダシを通じてボグド・ハーン政權と連絡をとり局面の打開をめざしたものの、もはやバボージャブにとって事態の好轉は客觀的にみれば一切、期待できない狀況へと陥っていた。

## 五 パッペンハイム事件とバボージャブ、そしてロシア政府の對應

第一次世界大戰の開始、ヨーロッパにおける獨露間軍事衝突は、これより遙か遠隔の地に盤居するバボージャブのもとへも餘波をもたらす。ロシア帝國は開戦以降、東部戦線での敗退、國內社會情勢惡化による軍需生産の停滯、そして歐米諸國からの軍需物資調達の困難に苦しみ、代わって軍需品の大量調達先として浮上したのが日本であり、日本本土からウラディヴォストークへ海上輸送し、さらに中東鐵道を利用してロシア本土へと搬入するルートがとられた。この輸送路を破壊・妨害すべく行動にでたのが北京駐在ドイツ公使館武官、フォン・パッペンハイム (Captain Werner Rabe von Papenheim) であった。ドイツ側の關連記録<sup>(25)</sup>とロシア側記録<sup>(26)</sup>は必ずしも一致していないが、チチハル附近のトンネル、および嫩江にかかる鐵橋を爆破し中東鐵道上の輸送を寸斷することを目的としていた。當該地域のトンネルと鐵橋は、日露戦争時に日本陸軍が「馬賊」を使い破壊工作を試みたところでもあった。一九一四年末に計畫は練られ翌一九一五年一月に決行に移されるはずであったが、すぐさま様々な形でドイツの謀略に關する情報は外部に漏れていた。

一九一五年一月一八日に、漢人四名、モンゴル人一名をもふくむパッペンハイム一行一三名が二〇匹の駱駝を率いて、バボージャブの本據へと向かう過程で、ロシア國籍の商人、ベルマンらと遭遇した。ベルマンは爆破目標地點に關する情報提供と引き換えに五萬ルーブル供與を打診されたが、「立派なことであるが、ドイツの金に目をくれず、みずからの同胞を裏切ることなく」、パーヴェル・ウサトウイ駐ハイラル露副領事へこの件を通報した。バボージャブは「ウルガの

ホトクト【ボグド・ハーン】の命令を聞くまでは、「パッペンハイムの謀略工作に對して協力等はいできないとの「口實」で一行を留め置いた。<sup>(27)</sup>バボージャブもボグド・ハーン政權へパッペンハイム一行の來訪を傳えており、在フレール露總領事館も「ウジユムチン旗との境界のガハイ・イリ【Гайи-или】地方にあるバボージャブの本營」へ張家口からドイツのキャラヴァンが到着したことを把握していた。<sup>(28)</sup>ついでかれらがハイラルへと移動したことがバボージャブから總理大臣ナムナンスレンへ緊急に傳えられ、露總領事館へも告げられた。<sup>(29)</sup>結局、バボージャブはパッペンハイムらに協力するふりをみせて一行一三人を四月四日に殺害し、武器、金品、物資を押収した。

バボージャブとしては、自分の存在がロシアの對獨戰にとって役立つ「親露」的人物であることをしめし、キャフタ會議における内モンゴル問題討議へも有利となることを期待していたと考えられる。パッペンハイム一行殺害の報は、バボージャブからウサトウイ露副領事へ連絡があり、四月一三日にはサゾーノフ露外相に報告されたが、さらに皇帝ニコライ二世のもとへも達した。バボージャブに關して、ニコライ二世は「素晴らしい、その者は誰れぞ」との下問を發している。<sup>(31)</sup>キャフタ會議の歸趨へはまったく何等の影響を與えなかったものの、ロシア帝國政府はバボージャブの貢獻に對する顯彰のため、十二等文官、リコフを八月に本據地、「東ホーチッド旗のバイン・ボラック【Байн-Олык】」へ派遣しリコフは報告書を殘している。<sup>(32)</sup>

## 六 孤立化するバボージャブと、かれの彷徨える軍團

一九一五年六月六日にキャフタ協定が締結され、中國宗主權下の自治外モンゴルというあらたな地域秩序形成が當事者間で合意された。それは同時に内モンゴルが、自治外モンゴルの領域から完全に除外されたことを意味する。北京政府はボグド・ハーン政權に參畫した内モンゴル人への恩赦・歸還問題については柔軟に對應し、どうしても歸還を希望しない場合は、ボグド・ハーン政權により外モンゴル領域内での殘留が許された。多くの内モンゴル人は、たとえ不本意であつ

でも故郷へと戻った。さらにボグド・ハーン政權へ參畫した内モンゴル出身者のなかで象徴的人物ともいふべき、ハイサン、オタイらは、歸還後、北京政府により優待されている。だが内外モンゴル接壤地帯に部隊とともに留まり、内モンゴルへの歸還も、外モンゴルへの移住にも應じようとしなないバボージャブの存在はきわめて特異であつた。バボージャブはガルサンダシを通じてボグド・ハーン政權に書翰を送り、キャフタ協定では「内盟がハルハと全く關係がないこと、ハルハ全四部が中華民國の一部となつたこと、ボグド・ハーンの稱號を袁世凱が賜與すること」を強く批判していた。<sup>(33)</sup>

バボージャブにとってはかれの部隊に對する處遇問題が、喫緊に解決されるべき課題となつていた。<sup>(34)</sup>バボージャブのもとに當初は十三營<sup>(35)</sup>二千八、軍馬一萬餘程度の兵力があつたが、さらにその數は増え約三千名に達してゐたといわれる。<sup>(36)</sup>當時のボグド・ハーン政權配下の兵力がほぼ一萬であつたことを勘案すると、バボージャブ部隊の存在は中國側のみならずボグド・ハーン政權にとつても厄介な問題となつてゐた。また三千名の兵力を集めたということは、内モンゴル人の不滿の聲をバボージャブ部隊が吸収してゐたことをしめしてゐる。一五年夏まではボグド・ハーン政權はバボージャブに對して給與を支給し續けていたが、バボージャブの言によれば「七千人」程度の潜在動員可能兵力を保持しており、それゆゑにバボージャブを重視せざるをえないという狀況にあつた。<sup>(37)</sup>一五年八月から九月にかけて、ボグド・ハーン政權軍務副大臣でバルガ出身のダムディンスレンがバボージャブの本據地を訪問し、「掠奪をやめ、中國政府の權力に従う」ように説得したが不調に終わった。九月二十九日づけクルペンスキー駐北京露公使から本省宛書翰では、バボージャブがシリントール盟内に「別個の王國【*Княжество*】」を作り、一等公の稱號でその長となる目論見」を抱いてゐることが報告されている。その要求を「中國への服従と一味の解散」の條件として、チャハル都統に對し聲明したが「中國人はバボージャブの目論見に否定的で、受け入れがたき要求」とみなしており、バボージャブ側も冬季戰鬭行動への準備をしていると傳えている。<sup>(38)</sup>

ダムディンスレンの説得行が失敗に終わった理由を、「日本政府によりバボージャブへの武器送附が約束された」ゆゑ

とボグド・ハーン政權、および在フレー露總領事館筋は解釋していた。<sup>(39)</sup>日本人とバボージャブの接觸に關しては次章で詳しく檢證するが、バボージャブに近づく日本人の影をロシア側が察知したのは、北京政府外交部から「ミオリ【Миори】」という名の「藥屋に身をやつした日本人將校」が、「バルガ獨立をめざす運動のために金錢と武器提供の申し入れ」を携え、バボージャブのもとへ赴いたとの情報をえたからであつた。<sup>(40)</sup>さらに八月に本據地を訪問したリコフに對しては、バボージャブは「ひとりの日本人が七月にやつてきて協力を申しでた」、そして「この日本人と一緒に武器を受けるために、タサ・シヨボー【Tasa-shyoby】が日本へ派遣されている」ことを明らかにし、同時にバボージャブは「豊富な自己資金」を使って、ハイラルへ人を派遣し武器、彈藥、冬服などを調達することに對して、ロシアからの援助を期待することも述べた。<sup>(41)</sup>

リコフの報告を受けて、ウサトウイ駐ハイラル露副領事は「ロシアの援助のもとにバルガが享受しているとおなじ狀況を、日本人の援助のもとに」、バボージャブはえることを期待していると分析していた。<sup>(42)</sup>バルガ地方は一九一一年のモンゴル獨立宣言にいち早く呼應し、清朝時代の副都統で同地の實力者、勝福がボグド・ハーンからフルン・ボイル大臣へと任命されていた。だが領域内に中東鐵道が通つていゝこともあり、キャフタ協定にもとづく外モンゴル自治地域からは除外されたものの、別個にバルガ地方の高度自治を保障する露中間協定が締結されていた。次章でみるように一六年三月までの時點では、日本人による援助は實際には開始されていない。バボージャブは日本人を引きあいにだすことによつて、ロシアの注意を惹く、あるいは關心を繋ぎとめようとしていた。

一〇月二八日、北京政府はバボージャブに對する討伐軍事行動を決定し、あらかじめバルガ、ハルハ地域へは作戰行動を及ぼさない旨を、駐北京露公使へ外交部が通告した。<sup>(43)</sup>蕭良司多倫鎮守使に率いられた中國軍はバボージャブ部隊を擊破、バボージャブらは外モンゴル領内のユグゼル僧院へと逃げこみ、ついで外モンゴルを通過しバルガ領内のハルハ河畔へと至り、『東亞先覺志士記傳』等によると「コロベンネーラ【yuban nara か?】をあらたな本據地とした。中國軍はバボー

ジャブ軍を追い外モンゴル領内へ越境、ユグゼル僧院を占據しガルサンダシを連行すると同時に、僧院内で発見した、バボージャブとガルサンダシとのあいだで交わされた書翰を、兩者間の「共謀」ないしは連携の證據として押収した。中國軍はそれ以上にバボージャブを深追いする氣はなく、とくにバルガヘロシア側の了解をえずに軍を進めることはない<sup>(44)</sup>と外交部は言明したが、ボグド・ハーン政權側は中國軍による外モンゴルへの越境・侵犯事件ととらえ、明らかに露中宣言第三條、および當該條項の遵守を誓約したキャフタ協定第五條に違反していると抗議し、ガルサンダシの逮捕連行とともにボグド・ハーン政權と北京政府間での對立を惹起した<sup>(45)</sup>。

兩者の仲介・調停に當つたのはクルペンスキー駐北京露公使であつたが、北京政府の陸徵祥外交總長は同公使に對して「バボージャブの兵士を中國政府に引き渡す」ならば撤兵の用意があること、バボージャブは「モンゴルの官吏」とみなしうるし、さらに一ヶ月前には「モンゴル政府から二萬ドル受け取っている」こと、それゆえにモンゴル側は「バボージャブの行動に對し責任がある」と語つた。さらにガルサンダシに關してはバボージャブの「共謀者」であるばかりか、かれの僧院が「バボージャブ一味の集結地點」であると斷言した。これに對してクルペンスキーは、このような回答の受理を拒否して、外交協定に違反した中國軍の越境に對する「斷固たる抗議」をおこなひ、中國兵の速やかな撤兵、ガルサンダシの釋放、中國兵の掠奪による僧院の被害賠償を要求したと二月一日づけ公電で本省へ報告している<sup>(46)</sup>。

一方、フレーでは陳錄がボグド・ハーン政權のツェレンドルジ外務大臣と交渉していたが、陳錄は中國兵を召還し「モンゴル政府によりバボージャブを引渡すとの條件で」ガルサンダシを釋放する用意があることを傳えていた<sup>(47)</sup>。一二月下旬に中國軍はユグゼル僧院から撤退したが、翌一六年正月に入ると陳錄は北京からの指令にもとづき、ガルサンダシは「みづから【中國軍】へ投降」したのであり、北京で「入観」つまり袁世凱大總統へ拜謁したのち歸還させると通告した<sup>(48)</sup>。結局、司法大臣、セチェン・ハン・ナワンナムリンを代表とするボグド・ハーンの使節が一月下旬に北京を訪問した際、ガルサンダシとともに「入観」し四月一五日にフレーへ戻つた。

他方、バボージャブおよびその部隊への處遇に關しては、一九二五年二月八日にサゾーノフ外相はクルペンスキー公使に對して、「中國の中立に對するかくも明白な侵犯に對して、中國當局がなんらの行動をとらなかつたとき、バボージャブがパッペンハイム隊殲滅でわれわれへしめした好意」を考慮して、「わが庇護のもとに置いておく」との方針を傳えている。バボージャブの部隊は壊滅状態にあり、モンゴル側もこれ以上、同部隊へ援助をする氣はなく、その結果「中國人にとつて現實的脅威」となつていないとの判斷からであつた。<sup>(49)</sup>バボージャブに對して「中國政府との和解」を勧告するよう、一月末、クルペンスキー公使からウサトウイ駐ハイラル副領事へ指示がでていた。<sup>(50)</sup>バボージャブからの回答が「かれのバルガ人の臣下」から二月末にウサトウイのもとに届いたが、バボージャブは(一)「自分の配下とともに居住しうる土地を、かれに與えること」、(二)「東部内モンゴル諸旗に残留している部隊員の全家族が」、「中國政府が移住のために指示した土地へ移動すること」を中國政府は認めること、上記二條件のもとで武器を中國側に對し引き渡し、ハルハへ移動することをほぼ同意していた。ただ「中國人の背信行爲を警戒して」、ロシアの調停のもとで「合意」が調印されることを希望していた。

だが「ウルガ政府」は、バボージャブがかれの部下とともに移住する土地を提供する一方、「その家族の移住許可に關して中國との交渉に入ること」へ難色をしめしていた。ウサトウイは同時に日本人が武器援助のための視察にバボージャブの本據地を訪れていることも報告しているが、後述する青柳勝敏らの來訪をロシア側は探知していた。<sup>(51)</sup>そしてバボージャブが希望する移住の地とは「バルガとの境界のハルハ側の地」であつたが、ミルレル駐フレー露外交代表(總領事)は、一九一六年一月一六日、ボグド・ハーン政權側が「バボージャブが、その盜賊たちとともに一ヶ所に集中することを危険とみなし」、武器を引き渡し様々な地方へ分散移住させることを提案してきたと報告している。<sup>(53)</sup>おなじころフレーでは陳籙がツエレンドルジ外相と「バボージャブ餘黨を招撫する件」で交渉していたが、外モンゴルに居住を希望するものはモンゴル側が招撫し兵器を回收する、他方、内モンゴルへ歸還することを願うものは中國政府が人員を派遣し對處する、と

いうことで概ね合意に達して<sup>(54)</sup>いた。

しかし移住するに際してボグド・ハーン政權へバボージャブは「自分の兵士への俸給支拂い」を要求したようで、三月末になるとバボージャブ部隊の解散・移住問題は暗礁に乗りあがる。ボグド・ハーン政權總理大臣、サイン・ノヨン・ハン・ナムナンスレンは、ミルレルに對して「日本がバボージャブに武器を供給したのではないか、日本がかれに援助を約束したのではないか」との懸念を語り、「そのことによりバボージャブの頑固さに説明がつく」とのべたが<sup>(55)</sup>、まさにナムナンスレンの不安は的中していた。

## 七 バボージャブと日本人「大陸浪人」

日露戦争期の日本人とバボージャブとの関係は結局のところ不詳であるが、ボグド・ハーン政權に投じて以降の時期において最初にバボージャブへ近づいた日本人は宮里好麿であり、一九一五年前半期にはすでになんらかの接觸がはまっていたと考えられる。宮里とはハイラル在住の日本人で「年來蒙古人間ニ醫藥ヲ業トスルモノ」あるいは「日本料理店主」と伝えられ、ボグド・ハーン政權によつてフルン・ボイル大臣へ任命されたバルガ地方の支配者、勝福のもとに「出入」していたという。一三年二月、ボグド・ハーン政權の内務大臣、ダーラマ・ツェレンチメド、總理大臣府副大臣、ピント王ゴンチュグスレンが日本政府との接觸を求め東京へ赴こうとしてハイラルまできたとき、かれらと本多熊太郎駐ハルビン日本總領事、さらに長春駐在日本陸軍軍人との連絡に宮里は奔走した。この時期、東三省地方でよくみられた、いわゆる「大陸浪人」とりわけ「蒙古」に關心をもつ「蒙古浪人」のひとりであつたが、川島浪速、内田良平などの「對外硬派」、つまり帝國主義的膨張論者・政客とは直接連絡のない、ハイラル在住の「田舎蒙古浪人」であつたよう<sup>(56)</sup>だ。さきにふれたロシア外交文書にでてくる「ミオリ」とは、明らかに宮里のことである。

『東亞先覺志士記傳』によれば、「大正四【一九一五】年六月頃、蒙古からタサ及びバタといふ二人の蒙古人が、海拉爾



在住の日本人宮里好麿に伴はれて窃かに日本へ來朝した。この二蒙古人は、巴布札布將軍部下の統領で、來朝の目的は軍資金並に武器彈藥の援助を日本から得やうとする」<sup>(57)</sup>ものであった。「タサ」はバボージャブが彰武縣を離れボグド・ハーン政權に投じるときから行動をともしてきた、かれの義兄弟、タサ・シヨボーであり、他方「バタ」とは、陳錄の調査では、東オシニユート旗出身の「達比巴塔」であつた。<sup>(58)</sup>ともあれタサ・シヨボーら二人の來日の目的は、武器・彈藥の入手にあつた。

辛亥革命以降の時期における日本の「滿蒙問題」をめぐる動きを概括すると、日本とロシアとのあいだでは一二年七月に第三次日露協約が締結され、「東部内蒙古」が日本の勢力範圍として承認された。このころから日本人間では「滿蒙問題ノ解決」が語られる情況がうまれていた。他方、中國では袁世凱が權力を掌握、さらに獨裁體制を固めた。このような中國情勢の展開に對して、日本の「對外硬派」により一三年七月二七日に對支連合會が結成されていることに注目しなければならぬ。その參加者のなかで、内田良平は一九〇一年に結成された黑龍會の指導者であり、辛亥革命時點においては革命派に對する援助をおこなっていたが、「中國革命を通じて、日本の對中國支配と權益の増大」を「第一目標」にしていた。だが日本の「滿蒙」、つまり「南滿洲」と「東部内蒙古」における權益なるものは、一二年の第三次日露協約において、ロシアをはじめとする關係列強により承認されることに由來するゆえに、この時點で内田は、「滿蒙」に關する「具體的方策を提示することはできていない」<sup>(60)</sup>。他方、川島浪速はといえば、内田のごとく黑龍會という對外硬派政治團體を主宰している譯ではなく、個人的盟友關係にある肅親王を擁して清朝復興を夢想する、政治的にみれば孤立した、しかも對外硬派においても特異な存在であつた。

ところが内田は一三年三月の宋教仁暗殺を契機に「革命派への評價を一氣に下げ」、「滿蒙問題の解決を主張」するようになる。内田らの動向を指摘したのが、本稿四でふれた阿部守太郎であつたが、かれは一三年九月五日に、「政府の滿蒙問題に對する消極的態度と、袁世凱への援助という列國協調の政策に對する不滿から」、内田良平、頭山滿らへ繋がる青

年によって暗殺されていた。なお初瀬龍平氏は、内田がめざす【滿蒙における】日本の保護國創出のため中核に豫定されていたのが、清朝の殘存勢力・宗社黨<sup>(61)</sup>と指摘するが、一三年時點では宗社黨はひとつにまとまった政治的結社ではなく、複数の指導者が分立する、弱體な集團と化していたので、「中核」となりえるはずもなかった。

こうした背景のもとで一三年七月、内田良平、大江卓、佃信夫、伊東知也、葛生能久、大竹貫一、五百木良三らにより對支研究會が結成され、ついで川島浪速、大井憲太郎らも合流し對支連合會へと發展した。同連合會結成は、日本の對外硬諸派が連合して、「滿蒙問題解決」のため、共同戰線を構築したことを意味する。ついで第一次世界大戰がはじまり歐米列強が中國問題へ積極的に關わることができなくなると、日本政府による「滿蒙權益」の確立を一氣にめざした動きが、一五年一月一八日におこなわれた對華二十一ヶ條要求であり、北京政府は五月九日に日本の最後通牒を受諾した。時期的にみれば、その直後にバボージャブの「特使」が武器と資金の獲得のため東京に現れたのであった。

東京到着後のふたりの行動に關して、『東亞先覺志士記傳』は以下のごとく書いている、

タサ、バタニ特使は東京到着後その使命を遂げるべく頻りに奔走したが、當時日本政府は支那政府並に列國に對する關係上、彼等の要望に應ずることを拒絶したので、彼等は更に大原武慶に頼つて民間有志の援助を求めた。恰もその頃川島浪速等が滿蒙獨立の計畫を抱いて窃かに活動してゐたから、川島は柴四朗、大竹貫一、松平康國、五百木良三、押川方義等を瀧野川名主瀧に會し（巻頭寫眞參照）熟議の結果、一は以て巴布札布が日露役に日本軍の爲に働いた功勞に酬ひ、一は以て相共通せる滿蒙獨立の大業を成就すべく進んで之を助けることになった。<sup>(62)</sup>

その結果、「愈々援助と決したので、特使の一人は喜び勇んで先ず復命の爲めに歸還した。次で同年十一月初旬、一味の士たる青柳勝敏預備騎兵大尉、木澤暢預備歩兵大尉等は若干の同志と共に、殘る一人の特使を案内に實地調査に赴き、海

拉爾から蒙古の眩野に入つて約四百七十清里を南へ南へと進み、哈拉哈河畔で巴布札布の軍と出會つた」としるす。

だが『東亞先覺志士記傳』の記述には、執筆者による事實の改竄がまみられる。まずバボージャブの本據地に關して、はじめ「西烏珠穆沁の附近なるダブソノールの邊」としているのは正しいが、「交通不便の邊境とて武器彈藥の補充を圖ること」ができないので、「北方哈拉哈河の邊」へ移動し「兵力の充實を圖ると共に、……タサ、バタ二統領を遙々日本に派遣した」と書くが、二人が來日したとされる一五年六月ころは、バボージャブの本據は元々の「ダブソノールの邊」にあり、同年一〇月末に中國軍の攻撃をうけて「北方哈拉哈河の邊」へと逃れている。さらに同書の記述によれば、「滿蒙獨立の計畫」を腹藏していた川島浪速の主導により大竹貫一、五百木良三など、いずれも對支連合會メムバーの對外硬派一派が「瀧野川名主瀧」に會して、バボージャブらと「相共通せる滿蒙獨立の大業を成就すべく」、バボージャブに對する支援を決め、一月初旬に青柳勝敏、木澤暢らを「實地調査」へ派遣したという順序で事態が進行していったとする。その「瀧野川名主瀧」における川島ら對外硬派の會合とは、一五年夏から秋にかけておこなわれたかのごとく理解されるが、實際には翌一六年三月二四日、つまり後述する、日本政府が「排袁方針」を決定して以後の時期に開かれている。<sup>(63)</sup> またバボージャブの特使が來日後に頼つた大原武慶は、退役軍人で東亞同文會幹事、一一年一〇月の武昌蜂起直後には武昌へ赴き革命軍に投じており、また亞細亞義會設立に關與するなどアジア主義的傾向が強く、トルコ・イスラーム人士とも接觸があつた。バボージャブの本據地へと赴いた青柳勝敏<sup>(64)</sup>は、もともと「蒙古に志」ある人物であつたが、一〇年に退役して一二年に宇都宮太郎參謀本部第二部長の援助で中國へと渡り、江西都督、李烈鈞の顧問に就き、第二革命に参加するが敗れ李とともに日本へ逃れた。一三年一二月には東京で浩然廬を開き、亡命中の革命派へ軍事教育をおこなつていたが、一四年、誤爆事件をおこし浩然廬を閉鎖している。したがつて大原、青柳ともに川島のような「清朝復興」をめざしていたとはいえず、むしろ革命派後援者であつた。

さらには川島が特使來日時に接觸したかさえ全く確認できない。「一味の士」として青柳、木澤の名をあげるが、いか

なる「一味」が成立していたかも知れない。青柳はバボージャブ死後ほどない一七年に書いた手記で「使者が來たのみでは先方の状況も能く分らない」との理由で、一五年一月に東京を發ち、二月一日に「哈拉哈河附近の天幕の中」でバボージャブと會見したと述べており、川島の關與には全くふれていない。<sup>(65)</sup>バボージャブは内外モンゴル境界において孤立しており、武器獲得という現實的目的のために日本へタサ・シヨボーらを送った。一五年末にはロシア仲介案があったに違いない。おそらくは川島浪速とは關係なく、退役將校の青柳、木澤ふたりは參謀本部筋の直接、間接の指示によりバボージャブの本據地偵察のため送られたと推測される。

## 八 日本外務省囑託、須佐嘉橘のバボージャブ本據地訪問

青柳勝敏らがバボージャブの本據地を訪れたところ「巴布札布等ノ情況視察」<sup>(66)</sup>のため、小池張造外務省政務局長は同省「囑託」として【東京に】居住シ著述ヲ以テ業ト爲ス」須佐嘉橘を派遣していた。須佐は一九一五年二月一八日夜、東京驛を發ち朝鮮を経由し、二二日朝に奉天に到着、矢田七太郎領事と打ちあわせをし二九日拂曉、ハイラルに到着した。「巴布札布の一團が必ず哈拉哈の野にありて其の部下の一部を海拉爾に潛入せしめあるは疑ふ可き餘地なきを想像」したからであつた。ここで「バタ」と會いバボージャブの「冬營せる地點」を確かめた。二月初めころ「參謀部或は陸軍の命を受けた」と稱する日本人五名が宮里好麿のもとに現れたと聞くものの、「聲を大にし政治とか國家とか體裁の好い口を開き滿蒙あたりをゴロツキ廻る徒」と想像したが、かれの「想像」は「適中」した。さらに宮里の周邊の日本人から「宮里は貴下が御聞きの通り卑劣で善く無い男で【日本人】一行とも仲が善くありません」との情報を与えた。

本據地は「哈拉哈河の右岸にあり」、「土名」を「ハルヘンゴル」というと須佐は書くが、「ハルヘンゴル」は“Qaldayin yul”と解釋されるので、「ハルハ河」の意味で地名ではない。本據地には日本人が三名おり青柳勝敏と木澤暢はすでに

前日、立ち去っていた。かれらからも「實は始め宮里の紹介にて一行は巴布札布を知るに至りたるを以て俄かに宮里を排斥する譯にも至らず私等の一行は彼の人となりを知悉したれば餘り感心しませぬ又此處の者も宮里の好くない事を知りたれば善くは思つて居りませぬ私等もいい加減に取扱つて居ります」と宮里の評判がすこぶる悪いことを須佐は知った。

バボージャブに關して須佐はオンニユートの出身と誤つて書いているが、「部下は大抵内蒙人にして烏蘭哈達（赤峰）附近の者多く内蒙人は少數にして支那人三四名あるも厨夫たり」、部下全體の數は二三三百、露國銃と短銃を裝備していたが彈丸が「缺乏しつゝありて補充に苦心しつゝあり」と實情を書いている。昨年八、九月にウジユムチンで蕭良司多倫鎮守使の部隊と交戦し、「非常なる打撃を蒙り輜重等を遺棄し負傷者を出し」たために、この地へ逃れてきたとする。須佐はバボージャブと會うことはなかったが、出發前夜、「四十餘の背低からざる肉附きの好き男來れりサタ【タサの誤記】は席を譲り宮里【好鷹】本枝【秦高秋】の兩名は體度を改めたり其の男は予に對し折角御訪問を辱くし有りがたく存しまた相悪く將軍（巴布を指す）不在にて殘念です私しが何事か代理を致す者なれば何事なりとも御用あらば仰せ附けられたし」との挨拶を受け、この人物が名乗ることなかったものの、バボージャブではないかと推測している。須佐はみずからの訪問に關して、

予は旬日にして此を離れしが種々なる妨害を受けたり然かし一般の視察をなせり只た惜むらくは日本人等の卑劣なる言動に妨げられ巴布等と打ち解交談をなし得ざりしにあり……巴布等は愚昧なる蒙古人なりと雖ども東京以來宮里の言動及び紹介を受けたる一行の行動にもいよいよ口疑いを挟みたるが如く見聞せり巴布は一の賊に過ぎず然し少部分ながら一の集團力あり有志の士をして操縦宜しきを得さしむれば或は使用し能はざるに非らず最初より視察の結果援助を與ふべき餘地あらば之を與へ而して之を操縦せんとするの一希望を有したり。<sup>(67)</sup>

と結論する。須佐を派遣した小池政務局長は、同年六月にバボージャブの特使が「軍資金並に武器彈藥の援助を」求めて來日したことを承知していた。すでに參謀本部筋は、退役軍人の青柳らをバボージャブのもとへ送り動かしだしたのに對して、小池はやや遅れたものの獨自に須佐を派遣し、バボージャブ部隊の實情を調査させ、その利用方法を探っていた。須佐は宮里らバボージャブ陣營にいる日本人の程度の惡さを批判しながらも、バボージャブ本人に關しては「有志の士をして操縦宜しきを得さしむれば或は使用し能はざるに非らず」との評價を下している。ハイラルでの觀察の結果として須佐は、ウサトウイ露副領事が「陰に之【バボージャブ】を庇護するか如き形跡あり」、「都合上之を或る場合には使用せんとする下心地あるか如し」と書いているが、バボージャブとウサトウイの關係が深いこと、換言すればロシアとの連絡も途絶えていないことを須佐は感知していた。

## 九 日本の反袁世凱工作とバボージャブの進軍、そして死

中國本土では袁世凱はみずからが皇帝となり帝制を實施することをめざしていた。このような袁の動きに對して、一九一五年一〇月二八日に、日露英三國の北京駐在公使は帝制實施延期の勸告をおこなったが、一二月二五日には、雲南省では蔡鍔、唐繼堯、李烈鈞らが獨立を宣言し「第三革命」がおこり、反袁世凱の動きは中國全國へと波及しつつあった。このような情勢をみて一九一六年ははじめから小池張造外務省政務局長を中心に陸軍・參謀本部、海軍・軍令部關係者が集り中國情勢を検討していた。青柳勝敏と木澤暢、そして小池が送った須佐嘉橘は一月下旬までには東京へ歸着し、それぞれ關係筋にバボージャブ部隊の状況に關して報告していたことは確かである。

一六年三月七日、日本政府閣議は「排袁方針」、つまり袁世凱を權力の座から追い落とすことを決定し、華南、上海、山東、東三省など中國各地で反袁運動を積極的に支援することとした。その閣議決定の一節には「帝國ニ於ケル民間有志者ニシテ袁氏排斥ヲ目的トスル支那人ノ活動ニ同情ヲ寄セ金品ヲ融通セントスルモノアリ政府ハ公然之ヲ獎勵スルノ責任

ヲ執ラザルト同時ニ之ヲ默認スル<sup>(68)</sup>」としるされている。この閣議決定のあと、三月二四日に川島浪速、五百木良三、押川方義らによる「瀧野川名主瀧」での會合があり、中國全土でおこなう袁世凱打倒工作のなかにバボージャブとその部隊を組みこむこととし、バボージャブに對する援助が開始された。それゆえにナムナンスレンが懸念したとおり、バボージャブは三月下旬にはロシア仲介案を最終的に棄てて、日本人の側へ傾斜したのであった。もともと援助といっても、青柳も認めるように「若干の金と武器彈藥<sup>(69)</sup>」を供給したにすぎない。對外硬派が畫策する反袁世凱工作のなかで、バボージャブ支援をもふくむ東三省における活動の中心人物へ擬せられたのが川島浪速であり、バボージャブのもとで指揮をとるのが青柳勝敏であった。おそらく「瀧野川名主瀧」における會合とは、肅親王善耆を擁した活動の本據地を東京から大連へ移すべく、川島が大陸へと旅發つまえに、柴四朗、大竹貫一、松平康國、五百木良三、押川方義の五人が開いた送別宴にはかならない。當日、記念として寫眞が撮られ『東亞先覺志士記傳』、『川島浪速翁』へおなじ寫眞が載せられているが、押川方義は正確に開催日を書きとめていた。

だが最初にバボージャブと接觸し「特使」を日本へ連れてきたものの、大陸浪人仲間からさえ「卑劣」と非難されていた宮里好麿は、一月末には日本人の一團から排除されていた<sup>(70)</sup>。もはや宮里の役割は終わり、かれのような人物を抱えていることは有害と判断されたのであろう。やがて宮里はフレリーに現れ、現地ロシア當局はその言動を警戒した<sup>(71)</sup>。さらに駐北京公使から日本大使へと轉じていたクルペンスキーは、六月二七日には「不穩日本人」のバルガからの追放を要請している。バルガ地方が第三次日露協約でロシアの勢力範圍内にあるため、一部日本人の活動はロシア側としては認めがたいものであった<sup>(72)</sup>。

川島浪速らが企てたという「舉事計畫」の當初案は、

川島浪速を總帥とした本部に於て總指揮を執り、入江【種矩】等は肅親王第七子憲奎王を奉じ、馬賊隊を率ゐて遼

陽東方の險要千山に立籠り、討袁の烽火を擧げて支那の軍を之に引附け、其間青柳【勝敏】等の指導の下に巴布札布軍が興安嶺を越えて滿洲地帯に侵入し、之に策應して清朝に心を寄せる滿蒙馬賊を隨所に蜂起させ、滿洲を一大混亂に陥れて討伐隊が奔命に疲れる虚に乘じ、木澤【暢】、後藤等は一舉して奉天城を手を収める、奉天省にして一味の手に歸すれば、黑龍江、吉林の二省は容易に處理響應せしめることが出来るから、更に三軍並みて萬里の長城を蹴破し、直に北京を衝いて、竝に内外蒙古と滿洲三省及び北支那を打つて一丸とする一大國家を建設し、以て東亞永遠の平和を確立する基礎を築き、亞細亞民族の福祉を増進する大業をなさう。<sup>(73)</sup>

という文字どおり、誇大妄想、荒唐無稽な「計畫」で、事實、謀議に關與した五百木良三でさえ、「大戰時分ですから、日本が其の機に乗じて東洋の指導者にならうと云う、頗る手前都合の良い様な事を考えて居つた」と後年、語っている。<sup>(74)</sup>

參謀本部で中國情報収集・謀略活動の統括者であつた參謀本部第二部長、福田雅太郎は、土井市之進、小磯國昭を「某目的を達成すべき任務」のため現地に派遣した。だが小磯國昭が回顧するには、「未だ少しも具體的な實行計畫が立ててある譯ではなし、殊に當時の支那通と言はるる程の人は、殆ど例外なしに中南支那の革命分子に少からず興味と好意とを寄せて居た」のであり、「急ぎ滿洲に渡つて仕事に着手したが、案の定種々の邪魔が這入つて來た。或は朝鮮方面より、或は支那本部より、或は滿洲自體より、甚しきは仲間の裡に迄軋轢が起つた<sup>(75)</sup>」という状態であつた。さらに前記一六年三月七日づけ閣議決定にある「民間有志者ニシテ袁氏排斥ヲ目的トスル支那人ノ活動」に對して援助を與えることを「默認」することに關して吉田茂駐安東領事、矢田七太郎駐奉天總領事代理から批判がで、さらに上原勇作參謀總長系の福田に對して長州閥に屬し陸軍次官から滿洲駐屯第十七師團長へ轉じていた本郷房太郎、さらに獨立守備隊隊長の藤井幸槌らは「參謀本部のかかる謀略ならびに中村【覺】關東都督の態度には強く批判的であつた」。<sup>(76)</sup>

川島浪速は三月下旬には、「獨自の舉事計畫の一部」を變更し「蒙古哈拉哈の巴布札布軍に對しては直ちに軍糧費並に



補給彈藥の輸送實施に着手する外、蒙古軍は七月初旬其の根據地を進發し、七月中旬頃洮南府―達【達の誤記】爾罕王府を面ぬる線に前進し、更に概ね七月下旬より八月上旬に亘る間に南滿鐵沿線、郭家店南北の地點に進出し來る可き作戰上の根本訓令<sup>(77)</sup>をだしたという。だが土井、小磯が現地に到着して間もなく、三月三一日に田中義一參謀次長は「土井大佐ノ擔任スル事業ハ支那全般ノ大勢ノ推移ト密接ノ關係ヲ有ス若シ南方ノ狀況ト適切ニ照應セサルトキハ却テ帝國ノ政策ヲ阻害」するとの判斷から、「其實施ハ當部ノ指示ヲ待チテ開始」するよう指示していた。<sup>(78)</sup>『東亞先覺志士記傳』でさえも「若し夫れ川島等の滿蒙獨立舉事と前記土井大佐以下の派遣將校との間に如何なる脈絡があつたかは、茲には唯疑問符を附して置く外はない<sup>(79)</sup>」としるしている。

一方、北京では三月二日、袁世凱は帝制取消しを宣言していたが、六月六日には袁が急死し黎元洪が大總統に就任した。日本政府は「排袁」という目的自體を失い、黎新政權支持を表明し、「今まで暗に助成の態度を執つてゐた滿蒙獨立の計畫に對し却つて之を阻止する態度」へと方針轉換した。だが六月二〇日にはウサトウイ駐ハイラル露副領事は、肅親王の提案でバボージャブが「滿洲黨」と連合し、「滿洲王朝復興のため、洮南府へ進撃を近く開始する」と駐北京露公使へ報告していた。<sup>(80)</sup>さらに「大清帝國中興宣統八年四月」の日附で、「和碩肅親王」から「勤王師蒙古軍司令官八寶加卜」へ下された、「扶清滅袁」についての漢語で書かれた檄文<sup>(81)</sup>がモンゴル人へも配られていた。だがバボージャブ側から「滿洲王朝復興」というニュアンスをふくむ、モンゴル語による文章がはじめて散布されるのは、袁の死後、バボージャブ部隊が南下を試みようとする六月以降のことである。バボージャブの部隊は六月二七日から三日間、『東亞先覺志士記傳』の表現によれば「勤王師扶國軍の大旆を中心に盛大なる祭典を行ひ、出師の宣言を發表し」、七月一日に南下を開始したことがウサトウイ副領事によつても確認されている。<sup>(82)</sup>さらに進軍の過程で大連の肅親王からも「宣統八年五月二十二日【一九一六年七月一〇日】づけモンゴル文文書が發せられている。<sup>(83)</sup>

『東亞先覺志士記傳』は、袁世凱の死により「根本の形勢は巴布札布が南滿洲に進出するまでの間に全く一變し<sup>(84)</sup>」とし、

『川島浪速翁』では袁世凱の死を八月上旬となぜか誤記したうえで「根本の形勢は、巴布札布將軍が根據地を進發して南滿洲郭家店に進出する迄の間に全く一變<sup>(85)</sup>」たと、いずれも袁世凱の死を知らずにバボージャブの部隊が根據地を出陣したがごとく書いているが、これは意圖的な改竄であろう。事實は袁の死と日本政府の態度變更を知つて、いわば中途で見捨てた日本に對する示威行動としてバボージャブ部隊は當初の計畫より早めて南下を開始し、八月一四日には郭家店を占領した。日本政府は川島へ「滿蒙舉事團」の解散を説得しようとした。結局、一六年三月に瀧野川名主瀧で會した關係者、すなわち柴四朗、五百木良三、押川方義、それに上泉德彌が、西川虎次郎關東軍參謀長と「解散ニ關スル協議ヲナシタル後之ヲ川島ニ傳ヘ同人ヲシテ承諾セシメタリ……其結果兵器ヲ蒙古軍ニ支給シ我勢力圏外ニ退避セシムルコト」<sup>(86)</sup>となつた。郭家店へ肅親王善耆の代理として赴いた川島浪速がバボージャブの部隊を閱兵したあと、「九月二日、五千八百の部隊は颯々長蛇の大縱列をなして、馬蹄の音も勇ましく蒙古を指して歸還の途に就いた」<sup>(87)</sup>が、一〇月六日、林西において姜桂題熱河都統配下にある米振標林西鎮守使の部隊との交戦中にバボージャブは流弾に當つて戦死し、かれの部隊はハルハ河畔の根據地へと向けて四散した。

## 一〇 結語、バボージャブの軌跡がしめすもの

バボージャブの四十餘年にすぎない短い生涯で特徴的なことはなにか。はじめスルグ旗における蒙漢衝突のなかで、モンゴル人側のリーダーとして知られた。漢人側からみれば「蒙匪」であつたが、W・ハイシツヒが説くようにモンゴル人の立場からみれば「ロビン・フッド」的存在であり、かれの行動には一貫して反「漢」的傾向が強い。轉機となつたのは清朝崩壞のときで、バボージャブもふくむ、すべてのモンゴル人へ「獨立モンゴル」の夢をあたえた。かれはフレーヘ赴きボグド・ハーン政權による内モンゴル進攻軍の指揮官となり、獨立モンゴルの領域に内モンゴルを編入すべく戦つた。つまり内モンゴルの地位が、かれにとっては一義的な問題であつた。それゆえ一九一三年末、ボグド・ハーン政權軍が撤

退を餘儀なくされたとき、かれの部隊のみは従わず國境地帯に留まった。だが一五年のキャフタ協定成立により、かれの希望は完全に絶たれた。

バボージャブは内モンゴルに自己の部隊を收容する「領地」を求めたものの、それも不可能で結果的に一六年一月の時点ではロシアの仲介で、ハルハ領内へバボージャブ部隊が分散移住することで、バボージャブとボグド・ハーン政權の交渉はまとまりかけ北京政府もこの案を受け入れていた。それが同年三月に至ると交渉が暗礁に乗りあげたのは、バボージャブと日本とのあいだで關係ができたからであつた。當初、バボージャブが日本へ接近した意圖は武器・彈藥の入手であつたが、日本の反袁世凱工作のなかでバボージャブの部隊は注目され、實行部隊として援助を與えられることとなつた。日本側關係者のひとり、川島浪速は肅親王善耆を擁した「滿蒙王國」樹立という夢想を追い求めていた。バボージャブは日本の反袁工作のなかで「滿蒙王國」ないしは「清朝復興」のため武裝蜂起をおこなうという筋書きが川島らにより立てられた。

ところがモンゴル人の立場からみれば「モンゴルの獨立」と「滿蒙獨立」ないしは「清朝復興」とは、まったく異なつた次元の問題で本來は併立しない命題でもあつた。モンゴル人は清朝が滅亡したゆえに獨立を宣言したのであり、なぜ「清朝復興」に手を貸さなければならぬのか理解できなかった。一九一二年の第三次日露協商により日本の勢力範圍が東部内モンゴルへ擴大されたところから、日本人のあいだには「滿蒙」という特異な地域概念が成立するが、モンゴル人にとっては、なぜ「滿蒙」なのかも理解しがたかつた。バボージャブも、このような意識を共有していたであろう。だが貧しい内モンゴル一般人から構成され假に歸郷したところでなんらの展望がない、かれの彷徨える軍團をどう維持するかがバボージャブにとって重要な問題であり、當初の目標とは程遠く哀れな姿で部隊を解散して外モンゴルへ分散移住することよりも、かれは日本人と組み武器・彈藥の援助をえることで、果たせざる夢の一部を實現するというよりは、あらたな活路を考えたゆえに日本人と提携したのであつた。しかも日本人への本格的な傾斜は、一六年三月末から死に至る半年の

あいだにすぎない。

バボージャブ亡きあと、かれの残存部隊が本據地へ歸着したのは一六年の年末であった。翌一七年には、ボグド・ハーン政權にとって後援者であったロシア帝國が崩壊、バボージャブ部隊はバルガで騒亂をおこす。さらにロシア革命の混亂がシベリアへ波及すると、反ボルシェヴィキ派ロシア軍人でモンゴル系の血をひくグレゴリー・セミョーノフの部隊に加わり外バイカル地方で内戦を戦い、ついでセミョーノフの失脚後はウンゲルン・シュテルンベルグ部隊へ吸収され外モンゴルの混亂へ投じている。一九二一年の清朝崩壊にはじまり二二年のモンゴル人民革命へと至る一〇年代を通じて、バボージャブの彷徨える軍團はロシア、モンゴル、中國という國境を越えモンゴル族の生活空間のなかで痕跡を残している。

## 註

- (1) ボグド・ハーン政權へ参加した内モンゴル出身者に関して、拙稿「ハイサンとオタイ——ボグド・ハーン政權下における内モンゴル人——」『東洋學報』第五七卷第一・二號（一九七六年一月）、一二五—一七〇頁、「The Minority's Groping: Further Light on Khaisan and Uda」『Asia-Africa Language Culture Research』第二〇號（一九八〇年二月）、一〇六—一二〇頁、などを参照。さらに最近では橘誠『ボグド・ハーン政權の研究』（風間書房、二〇一一年）が、ボグド・ハーン政權の活動に對する内モンゴル側の對應をも分析した勞作である。
- (2) 「第一次・第二次滿蒙獨立運動」という名稱での、日本側研究者による理解の問題點に關しては、拙稿「滿蒙獨立運動」という虚構と、その實像」『慶應義塾福澤研究セ
- (3) ВНАУ-ын ШУА-Түүхийн хүрээлэн, Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын түүх, Дэд боть, (Улаанбаатар: Улсын хэвлэлийн хэрэг эрхлэх хороо, 1968), 530-535-р тал.
- (4) 中見立夫「Babjad and His Uprising: Re-examining the Inner Mongol Struggle for Independence», *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko (the Oriental Library)* No. 57 (1999), pp. 137-153. なお上記拙稿發表後「バボージャブを主題とした專論としては」Х.З.Донжид ба Х.Ж. Өлзий, *Шударга Баатар Баяужид* (Улаанбаатар: Монгол улсын их сургууль—Түүхийн танхим, 2002), 47 хуудас. 烏蘭塔娜「ボグド・ハーン政權成立時の東部内

モンゴル人の動向——バボージャヴを例として」『東北アジア研究』第一二號（二〇〇八年三月）、九七一—一八頁。があり、ともにモンゴルの國立中央アルヒーフ所藏史料にもとづくが、前者は參照文獻一覽等もふくめ、わずか四七頁の小冊子で、かつ後半半分はバボージャヴの長男で、モンゴル人民革命後にモンゴルへと赴いたヌンネイジャヴに關する内務省文書の紹介である。

- (5) バボージャヴの名前は、ウイグル文字表記では Babujab ないしは Babujab、キリル文字では Barykjab とする。漢語表記では巴布札布、八寶加卜、日本語片假名表記ではバプチャップなどと様々に記述されているが、本稿ではバボージャヴとする。

- (6) 永井リサ・安富歩「凍土を驅ける馬車」、安富歩・深尾葉子編『滿洲』の成立——森林の消盡と近代空間の形成——（名古屋大學出版會、二〇〇九年）、一〇九—一一頁。孟和寶音「近代內蒙古行政建制變遷研究」（瀋陽、遼寧民族出版社、二〇一〇年）、二七七一—二八四頁。

- (7) Owen Latimore, *The Mongols of Manchuria* (New York: The John Day Company, 1934), pp. 221-224. 一方、滿洲國時代に編纂された『彰武縣志』にも、置縣當初、同地のモンゴル人が反對し「蒙匪」があちこちに起つとの記述があるが、「著名蒙匪」として名があげられているのは、「羅海令」、「白音大來」、「六十三」【モンゴル語の *juhan yurban* の漢語譯表記か？】、「那木四賴」の四人で、バボージャヴの名はない。王恕修、王德輝等纂『彰武縣志』（大同二

年序）、卷四、一五—三〇丁。

- (8) ラティモアおよびハイシツヒ兩氏による記述の文脈からみると、一九〇四—五年（日露戰爭）以前の時期に關わるバボージャヴの活動（ハイシツヒは「ロビン・フッド的」なものとする）を題材とした歌謡と理解できる。Walther Heissig, *Ein Volk sucht seine Geschichte* (Düsseldorf: Econ Verlag, 1964), S. 143.; *Geschichte der mongolischen Literatur* Bd. 2 (Weisbaden: Otto Harrassowitz, 1972), S. 826. 生前のハイシツヒ教授へ筆者は、この歌謡の内容に關してお尋ねしたが、當時は著名なものであったが正確に覚えていないとお話であった。内モンゴルでは、文化大革命終了後、モンゴル口承文藝に關する研究と収集が活發化し、たとえばトクトホ、ゴンチュグスレンなど、外モンゴルへ赴いた人物の歌謡についても論及されているが、バボージャヴに關する歌謡は、口承文藝専門研究者さえ、その存在を知らなかった。盧明輝氏は、かつて文革以前に一度、聞いたことがあるとの由だが、それは「黃龍の歌」という内容であったという。氏の記憶が正しいとすれば、一九一〇年代後半の活動に關する歌謡であろう。なお註(35)も併照されたい。

- (9) 烏蘭塔娜、前掲論文、一〇四頁。

- (10) 陳錄「止室筆記」（出版所等未記載、民國六年序）、七二頁。

- (11) 烏蘭塔娜、前掲論文、九七頁。

- (12) 黑龍會編『東亞先覺志士記傳』中卷（黑龍會出版部、昭

和一〇年)、六二六頁。ただ同書下卷(同右所刊、昭和一年)「列傳」所收「若林龍雄」の記述にみられるような、若林とバボージャブの關係が、本當にあつたかは確認できない。

- (13) 前掲『彰武縣志』によると一九〇五年に「團練」を改編し警察とし、「巡警總局」ついで「警務局」を置いたとするが、その關係者のなかにバボージャブの名前は一切みえない(卷二、一八丁)。同書が刊行された大同二年當時、滿洲國では「親日派」とされたバボージャブに對する評價が高く、さらに同書が滿洲國地方官吏により編纂されたにかかわらず、いかなる事情か不明である。

- (14) オタイの蜂起に關しては、前掲拙稿「ハイサンとオタイ」を参照されたい。

- (15) 陳籙、前掲書、七二頁。

- (16) 烏蘭塔娜、前掲論文、一一五頁。

- (17) モンゴル國立中央圖書館(Монгол Улсын Үндэсний Төв Архив、略稱 МУУТА) 所藏文書「Фонд А-2〔總理大臣府〕」Данс 1, ХН 80-5, Үсүц-үн ёруулан-и үегин тймд-ин госун-и теуген Бабуяб-ака бүгиде уетлингкэй яастуца уалмин-а, Олон-а ергэдэгсэн-и гуадауаг он едийн дундад сарайн гоин ууван-а。

- (18) 同「МОНГОЛ-ЫН Э.Д.ГРИММ, Сборник договоров и других документов по истории международных отношений на Д. Востоке (1842-1925) (Москва: Изд. Ин-та востоковедения, 1927), no. 73, стр. 178-179. ㄴ

参照。

- (19) 「滿蒙」および「東部內蒙古」という地域概念に關しては、拙稿「地域概念の政治性」、溝口雄三・濱下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える「1」／交錯するアジア』(東京大學出版會、一九九三年)、二七三—二九五頁、並びに「內モンゴル東部」という空間—東アジア國際關係史の視點から—、早稻田大學モンゴル研究所編『アジア地域文化學叢書Ⅷ／近現代內モンゴル東部の變容』(雄山閣、平成一九年)、二二—四六頁、を参照されたい。

- (20) 『日本外交文書』大正二年第二冊(外務省、昭和三年)、No. 830 阿部政務局長稿「支那ニ關スル外交政策ノ綱領」(大正二年稿)、一〇六七頁。

- (21) 拙稿「Russian Diplomats and Mongol Independence, 1911-1915」、Stephen Kotkin and Bruce A. Elleman ed., *Mongolia in the Twentieth Century, Landlocked Cosmopolitan* (Атлант: M.E.Sharpe, 1999), pp. 69-78.

- (22) 橘誠、前掲書、一八八—一九〇頁。

- (23) 中國第二歷史檔案館所藏北洋軍閥政府檔案、蒙藏院檔案(全宗號一〇四五)「外蒙海山因與參謀本部密通聯系報功請賞各次密呈及關於獎封其來京長子與海山自行來京各項文書函電案卷(目錄號二二六五)所收檔案、一九一四年八月起一九一五年一月止。

- (24) МУУТА, Фонд А-5〔軍務省〕Данс 1, 34, Яаг-ууаг уаг-уагсан үегин етн-е кіс-аг-ан монгол-уд-и тлбсідкен

toqutıyıcı tısmel četig-i uctınkılın ırsıacı sayıd sıdıru  
beyatır gıng Babıyab-ın qarıyıcı tısmel četig-in qosıru  
ıptıru ner nasu toı-a-yı toduıruyılan bıcıgıyü erıgıkü čese,  
Olın-a erıgıdeğesen-ü tabıduıar on qadırtıp tetıgün sarayın  
arban yısır-e.

- (25) «イン側史料」およびイン帝國外交文書を使用した  
“The Parrenheim Expedition” に関する記述を Michael  
Underdown, “Aspects of Mongolian History, 1901-1915”,  
*Zentralasiatische Studien* Bd. 15 (1981), pp. 185-189. を参  
照。

- (26) モスクワのロシア帝國外交文書館 (Архив внешней  
политики Российской Империи) 略称 АВПРИ) に所藏  
される「ハボーンジャンおよびパシビンノムン閣僚ロムン諾  
國外交文書は」おもに左記の дела に收められている  
АВПРИ, фонд 143 [Китайский стол], опись 491, дела  
3105 [Попытка Бабулджаба образовать отдельное  
княжество въ Внутр. Монголии, 1915-1916] и дела  
3339 [Экспедиция Пашенгейма въ Монголию, 1915-  
1916 г.].

- (27) “Дѣятельность нѣмцевъ въ Монголіи”, *Вѣстникъ*  
*Азіи* No. 35-36 (Книга III-IV-1915г.), сс.117-119. 『支  
ルビノ南洋學會誌』雜報欄に掲載された同記事は「ロム  
ン外交文書に現れないパシビンノムン事件の實情を傳へてい  
る點で貴重である」。

- (28) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Секретная

телеграмма Управляющаго Генеральнымъ Консуль-  
ствомъ въ Монголіи, Урта, 24 Февраля 1915 года,  
No.18, л.3.

- (29) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Секретная  
телеграмма Управляющаго Генеральнымъ Консуль-  
ствомъ въ Монголіи, Урта, 25 Февраля 1915 года,  
No.20, л.4.

- (30) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Секретная  
телеграмма Вице-Консула въ Хайларѣ, 31 Марта 1915  
года, No.60, л.43.

- (31) *Международные отношенія в эпоху импера-  
лизма: Документы из архивов царского и временного  
правительства, 1879-1917 гг.* сер. III, том.7, часть 2  
(Москва: Государственное социально-экономическое  
издательство, 1935), стр. 134.

- (32) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Копія  
отчета канцелярскаго чиновника Губ. Секр. Рыкова о  
позѣдкѣ въ Силингольской сеймъ, Хайларъ, 3 Сентя-  
бря 1915 года, лл.117-123.

- (33) МУУТА, Фонд А-4 [本條譯] Данс 1, ХН 331,  
Bügide uctıngıkılın ırsacı уапп-а-а дедеді уагıу-ı дауıу  
öber öberin qarıyıcı уапп-а sayıd gıng Babıyab-а-а  
ıteğesen kereg, Olın-a erıgıdeğesen-ü tabıduıar on уırtıban  
sarayın qoın ıgeen.

- (34) МУУТА, Фонд А-4 Данс 1, ХН 327, Dotıyadı уапп-

ača jegin eminedü kicayapın tüşimel çerig-üd yurban eteged-im ger-e-yi dayaqu ugei kemeşsen nigen kereg-i kian keldeşsen ba, sayıd yarayıu oduşan toı doıyırııdıqu-yı yuıyırı aıladıdayad yosuıyar boludayşan medegden ireşsen kereg, Olon-a ergüdeşsen-i tabudıyar on jıruıyan sarayın qotın jıruıyan.

- (35) 一九一五年八月に本據地、バイン・ボラックでバボージヤブと會つたりコフも、その兵力を二千と報告してゐる。むしろ注目されるのは「十三營」の表現であり、ラティモアおよびハイインシツのらう、*“Thirteen Companies / Dreizehn Kompanien”* の下線箇所が「營」の意味である。すれば、バボージヤブを題材とする「歌謠」とは、一九一五年に内外蒙境界地帯で獨白の動きをしてゐたところのバボージヤブとその部隊を語つたものであろう。
- (36) 中國第二歴史檔案館所藏北洋軍閥政府檔案、蒙藏院檔案（全宗號 一〇四五）、「政事堂機要局抄交察哈爾都統報告内蒙地方武裝巴布札聯絡外國擴展軍事情影」、并請限制外人游歷呈文案卷（目錄號 一二六五）、「蒙藏院收機要局交批令、民國四年九月十四日および民國四年十月一日。
- (37) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Копия донесения Вице-Консула въ Хайларъ на имя ИМПЕРАТОРСКОЙ Российской Миссии въ Пекинъ отъ 5 Сентября 1915 года за No.159, л.115.
- (38) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Письмо, ИМПЕРАТОРСКАЯ Российская Миссия въ Пекинъ въ

Четвертый Политический Отдѣль, 16 Сентябрь 1915 года, No.294, л.1.

(39) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Дипломатического Агента въ Монголии, Урга, 15 Октября 1915 года, No.247, л.4.

(40) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Секретная телеграмма Посланника въ Пекинъ, 6 Июля 1915 года, No.387, л.100.

(41) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Копия отчета канцелярского чиновника Губ. Секр. Рыкова о поѣздкѣ въ Силингольскій сеймъ, Хайларъ, 3 Сентября 1915 г., л.123.

(42) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3339, Копия донесения Вице-Консула въ Хайларъ на имя ИМПЕРАТОРСКОЙ Российской Миссии въ Пекинъ отъ 5 Сентября 1915 года за No.159, л.115.

(43) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Посланника въ Пекинъ, 15 Октября 1915 года, No.617, л.5.

(44) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Посланника въ Пекинъ, 2 Ноября 1915 года, No.667, л.12.

(45) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Дипломатического Агента въ Монголии, Урга, 15 Ноября 1915 года, No.294, л.19.



- (46) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Посланника въ Пекинѣ, 18 ноября 1915 года, No.725, л.28. 北京政府外交總長に於てハボーシヤブとボグド・ハーン政權との關係が切れていふことの發言は、陳錄のフリーにおける調査にまつてゐる。陳錄前掲書、七三頁。
- (47) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Дипломатического Агента въ Монголии, Урга, 19 ноября 1915 года, No.297, л.30.
- (48) МУУТА, фонд А-4 Данс 1, ХН34-10, Дипдаду цис-ш екин saidi Ĉen lu-eĉe Yegüŋjer qutuŋu-yi barluayud boĉayacu oĉt-a, ĵerge iġesgen keŋeg. 【特任都護使駐紮庫倫辦事大員陳錄致外蒙古自治官府照會、洪憲元年正月七日（共戴五年一一月四日）】 Olon-a ergüŋdesen-ü tabuduyar on arban qoyar sarayin döŋben.
- (49) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Министры иностранныхъ делъ, 25 ноября 1915 года, No.6073, л.43.
- (50) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Посланника въ Пекинѣ, 16 ноября 1915 года, No.714, л.24.
- (51) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Копія секретнаго донесенія Вице-Консула въ Хайларѣ въ ИМПЕРАТОРСКУЮ Россійскую миссію въ Пекинѣ отъ 14-го Декабря 1915 года за No.281, л.65.
- (52) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Посланника въ Пекинѣ, 30 Декабря 1915 года, No.834, л.79.
- (53) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Дипломатического Агента въ Монголии, Урга, 3 декабря 1916 года, No.4, л.82.
- (54) 陳錄前掲書、一〇八頁。
- (55) *Международные отношения в эпоху империализма. Документы из архивов царского и временного правительства, 1878-1917 гг. сер. III, том.10* (Москва: Государственное социально-экономическое издательство, 1937), стр. 424.
- (56) 宮里好麿およびシレンチメドの日本訪問計畫に關しては、拙稿「ボグド・ハーン政權の對外交渉努力と帝國主義列強」『アジア・アフリカ言語文化研究』第一七號（一九七九年三月）、九一—七頁を参照された。
- (57) 黑龍會編、前掲書、中卷、六二五頁。ちなみに會田勉『川島浪速翁』（文粹閣、昭和一一年）の「第二次滿蒙獨立運動」に關する記述と、『東亞先覺志士記傳』の該當箇所は文章がほぼ同一である。『東亞先覺志士記傳』は「東亞先覺志士」という名のもとに東アジアに關わつた政治的立場も多様な人物の事績を收録した、葛生能久の監修による全三冊の巨冊である。多數の執筆者に寄稿を求め、當然その編集には長時間を要したとおもわれるが詳細は不明。
- (58) 陳錄前掲書、七二—七三頁。ただし陳錄がしるす「達

「比巴塔」はひとりの人物ではなく、「達比」と「巴塔」という二人の名前を書こうとしたのかも知れない。日本語文献が伝える「バタ」は「巴塔」と一致するが、「達比」の「比」の字が誤植あるいは誤記であつたとすれば、結果的に「タサ」の誤音寫となつた可能性がある。

- (59) 辛亥革命期から「第三革命」期における内田良平らの活動に關しては、初瀬龍平『傳統的右翼・内田良平の研究』（九州大學出版會、一九八〇年）、一二五—二〇五頁を参照。

- (60) 初瀬龍平、同右書、一五二頁。

- (61) 初瀬龍平、同右書、一六九頁。

- (62) 黒龍會編、前掲書、中卷、六二八頁。

- (63) 『東亞先覺志士記傳』所收「川嶋浪速氏所藏」の「第二次滿蒙獨立運動協議記念、於瀧野川名主の瀧」という記念寫眞（「川島浪速翁」によれば「大正五年獨立運動計畫最初の結束者」と同一の寫眞（押川方義舊藏）が基督心宗教團不二山莊に現存しており、押川の手で「24 March 5th Year of Taisho」と書かれている。藤一也『押川方義——そのナショナリズムを背景として——』（燦葉出版社、一九九一年）、一三三—一三四頁を参照。

- (64) 宇都宮太郎の日記一九二二年一月一六日の條に、青柳勝敏に關して「豫て蒙古に志ありし故、今尙は然るやを質せしに、熱心之を希望する趣に付き、餘の準備金にて派遣に決し約束す」（「宇都宮太郎關係資料研究會編『日本陸軍とアジア政策、陸軍大將宇都宮太郎日記』」（岩波書店、二〇

〇七年）、七六頁」とあり、同年五月二日の條に、「青柳勝敏、不日蒙古へ出發に付き來衛告別。之に差支無き範圍内に於て方針を示す」（「同右書、一〇七頁」とあるところをみると、青柳は二二年に「志」があつて「蒙古」へ行こうとしたが、なんらかの事情で江西都督の顧問となつたと考えられる。

- (65) 青柳勝敏「巴布札布軍（上）」『亞細亞時論』第一卷第四號（大正六年一〇月）、九六—九七頁。

- (66) 外務省外交史料館所藏外務省記録、一六—一四〇、蒙古視察關係雜纂所收、須佐嘉橘の履歷（大正八年六月）。

- (67) 外務省外交史料館所藏外務省記録、一六—一六三、蒙古に關する事情密偵一件所收、「秘」哈爾哈旅行誌（賊情一般）、大正五年三月十七日須佐嘉橘より提出。

- (68) 『日本外交文書』大正五年第二冊（外務省、昭和四二年）、No. 47「袁世凱ノ權威失墜其他中國ノ時局ニ鑑ミ日本ノ執ルベキ方針ハ中國ノ優越勢力確立ニ在ルコト及之ガ實現ノ政策決定ノ件」、閣議決定、大正五年三月七日、四六頁。

- (69) 青柳勝敏、前掲文、九九頁。

- (70) 前掲『日本外交文書』大正五年第二冊、No. 88「巴布札布ニ關係アル宮里等處分ノ件」、在長春山内領事ヨリ石井外務大臣宛、大正五年五月七日、八七四頁。

- (71) АВПРИ, фонд 143, дела 3105, Секретная телеграмма Дипломатического Агентства въ Монголии, Урга, 28 Марта 1915 года, No. 100, л. 92.

- (72) АВПРИ, фонд 143, дела 3105, Секретная телеграмма Поста. въ Tokyo, 14 июня 1916 года, No. 261, л. 111. 前掲『日本外交文書』大正五年第二冊, No. 907「ハルガニ於テ騷擾スル日本人追放方要請ノ件」【原文は英語】在本邦露國大使ヨリ日本外務省宛、大正五年六月二十七日、八八九頁。
- (73) 黒龍會編、前掲書、中卷、六三三—六三四頁。
- (74) 五百木良三「故福田將軍を語る」、山根倬三編『福田雅太郎追悼録』（福田雅太郎追悼録刊行會、昭和一〇年）三頁。
- (75) 小磯國昭「故福田將軍の面影」、山根倬三編、前掲書、一七八—一七九頁。
- (76) 栗原健、前掲論文、一四九頁。
- (77) 會田勉、前掲書、二二八—二二九頁。
- (78) 前掲『日本外交文書』大正五年第二冊, No. 858「土井大佐擔任事業ハ參謀本部ノ指示ヲ待ツテ開始スヘキ旨訓令ノ件」、田中參謀次長ヨリ關東都督府西川參謀長宛電報、大正五年三月三十一日、八五六頁。
- (79) 黒龍會編、前掲書、中卷、六三七頁。
- (80) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Вице-Консула въ Хайларъ, 7 июня 1916 года, No. 145, л. 110.
- (81) МУУТА, фонд А-4 Данс 1, ХН 331-51, Төр тойгиген үеке ёнг уус-ун delekei dakin-i dumdadu-aça manduyиqu айтау-ин түсимел ёнг-и уейинкиен үсараqu sayи siduуu bayatuи ulus-ун түсий-e güng Badyab nar-ун biёig, Qadtu yosun-u наймадууар on иттууар saraуin arban dilyуan-a.
- (82) АВПРИ, фонд 143, опись 491, дела 3105, Секретная телеграмма Вице-Консула въ Хайларъ, 18 июня 1916 года, No. 158, л. 111.
- (83) МУУТА, фонд А-4 Данс 1, ХН 616, Та йуан-и уаёат-аёа Шу күйиn-и кигегүйгсен иегүйгсен кедип үсиг-ин biёig, Yeke ёнг уус-ун qadtu yosun-u наймадууар on tabun saraуin qotin qoyara.
- (84) 黒龍會編、前掲書、中卷、六四〇頁。
- (85) 會田勉、前掲書、二二六頁。
- (86) 前掲『日本外交文書』大正五年第二冊, No. 932「滿蒙舉事團解散ニ關シ報告ノ件」、西川關東都督府參謀長ヨリ田中參謀次長宛、大正五年八月一六日、九〇一—九〇二頁。
- (87) 黒龍會編、前掲書、中卷、六四八頁。